

[特別支援教育]

「準ずる教育」における児童のキャリア発達を促す支援についての一考察
 - キャリア教育と教科学習, 自立活動を関連付けた実践を通して 児童の変容から -

関 理恵*

1 はじめに

中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(平成11年12月)において「キャリア教育」という文言が公的に登場した。「キャリア教育」とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。このキャリア教育は、一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしい能力や態度を育てることを目指している。キャリア教育が目指す子供の姿は、自分が自分として生きるために「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現させていく姿である。人や社会とのかかわりの中で自分の役割を果たし、他者や社会に関わることにより、「自分らしい生き方」を形成していく。

これらを受けて、平成21年告示特別支援学校高等部学習指導要領では、キャリア教育・職業教育についての文言が明記された。また、特別支援学校小学部・中学部指導要領解説では、キャリア発達に関する内容が加えられた。特別支援学校での計画的・組織的なキャリア教育の推進の重要性が改めて指摘されることになった。「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年)では、「キャリア発達」を「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」とし、キャリア発達に関わる能力を「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」へ移行することを求めている。(図1)

しかし、現状では、進路選択をすることや勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていることが学校教育全体の課題として挙げられている(文部科学省, 2011)。

特別支援学校においては、これまでも一人一人の「自立」と「社会参加」に向けての取り組みが進められてきている。そのため、キャリア教育の意義を踏まえた取り組みが行われてきていると考えられるが、キャリア教育は、一人一人のキャリア発達を目指す取り組みの積み重ねであることから、校内で行われる進路指導、職業教育だけでなく、小学部からのキャリア教育の視点を取り入れた授業作りを行っていくことが一層求められている。

とりわけ、肢体不自由児の生活に目を向けると、日常生活や学習上の身体の運動動作の制限による直接的な経験や体験の不足に伴い、社会や自然の事物への理解が十分でないことがあり、周囲の人々から支援を受けることが多くなりがちである。その結果として受動的になり、主体性が乏しくなりがちである、という指摘がある(高知県教育センター, 2011)。自分の言動に自信がもてなく、教師を頼るなど、筆者が担任する児童(以下、A児)にもこのような姿が当てはまることが多々見受けられた。

そこで、本研究では、A児に付けたい力の重点目標を絞り、キャリア教育で育む「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの力に整理し、それに基づく授業実践を行うことにした。A児は準ずる教育で学年相当の教科学習を行い、自立活動の時間も設けて学習をしている。A児の実態把握に基づき、各教科学習と自立活動をキャリア教育の視点と関連付けることで、将来の自立と社会参

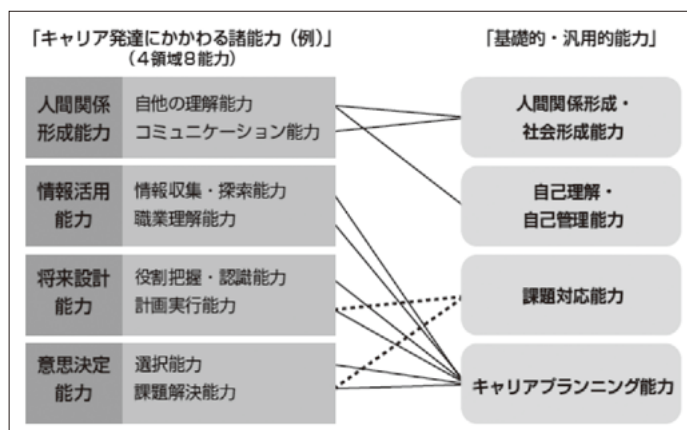


図1 「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換

* 新潟県立小出特別支援学校

加に向けて付けたい力をより明確にし、A児のキャリア発達を育成したいと考えた。そして、自分をみつめ、将来の夢や希望をもち、それを実現しようと前向きに目標をたてたり、努力したりするA児の姿を目指して実践を行った。

2 研究の目的

本研究では、A児のキャリア発達を促す授業実践をする。その取り組みによるA児の変容を捉え、検証していく。このことで、準ずる教育課程における児童のキャリア発達を促す取り組みの在り方を追求することを目的とする。

3 研究の対象

(1) 対象児童について

特別支援学校小学部に在籍する6年生の児童1名である。平成27年度の2月に当校に転入してきた。隣接する福祉施設から登校している児童である。二分脊椎症があり、下肢麻痺、水頭症、右耳難聴を合わせ有する。水頭症の治療として、乳児期と小学5年生の時にシャント手術をしている。

(2) 学習形態

学級はA児のみの1名の学級である。「準ずる教育課程」で学年相当の学習を行っている。基本的には、教師とA児のマンツーマンの学習を行っているが、全校行事や他学部との集会や交流活動には参加する。各教科学習に加えて自立活動の時間も設けて学習を行っている。

(3) 身体的な特徴

車椅子を使用して生活している。下肢麻痺があるため、下肢の随意的な動きは困難である。上肢は、随意的な運動が可能であり、腕の伸展や屈曲に問題はなく微細な動きも可能である。車椅子に乗って身体を動かすことが好きであり、体育の時間や昼休み等、思い切り体育館を車椅子で走り回ったり、バスケットボールをしたりすることが多い。

日常生活では、上肢（特に腕）を使って活動することが多い分、肩や腕にかかる負担が大きく、肩や腕の痛みを訴えることが多々ある。マッサージやストレッチをしたり、身体を休めたりするなど身体のケアが必要である。

(4) 心理的な状態

気が向かないことや、想定外のことが起こると、泣いたり、頭を叩いたり、舌打ちをしたりするという行動があると引き継ぎの際に申し送りを受けていた。私が担任になった4月当初にも、自分の意にかなわないことがあると頭を掻きむしって泣くことがしばしばあった。初めてのことに對しては、自分で行動を起こそうせずに消極的で拒否を示したり、自分でできることでも援助を要請したりするなど、他者からの支援に依存的な様子がある。困難な場面で甘えたり泣いたりして状況を回避しようとする精神的に弱い一面が多く見られる。

4 実践と手立ての実際

(1) 実施期間

平成28年4月～平成29年3月

(2) 実践・手立てのねらいと方法

① A児のキャリア教育で身に付けたい力とその具体的実践計画の作成（表1）

A児の実態を踏まえ、育みたい力をキャリア教育の4つの力と関連付けた。それを各教科、領域、合わせた指導の内容と関連付け、実践を行った。

表1 身に付けたい力と具体的実践計画

A児の将来の目指す姿：自分の考え、夢や希望をもちそれに向かって努力する姿					
↓					
キャリア教育で育みたい力（小学6年生段階）					
基礎的汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力	
	周囲の人と進んで関わり、コミュニケーションする力	自己の良さや自分らしさに気づき、自身の内面を振り返りながら主体的に行動する力	自身の課題に気づき、その解決に向けて粘り強く取り組む力	将来の夢や希望をもち、自分で選択、判断して自己の生き方を考える力	
	各教科	自立活動	総合的な学習の時間	特別活動	道徳
付けたい力	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識技能を身に付ける。 ○自己の考えを意思表示する活動を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の良さや自分らしさを見付け、得意なことを伸ばし、自信をもつ。 ○身体の変化や運動機能について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○将来の夢や憧れの姿をもち、目標への意欲を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○仲間と関わりながら、自分の気持ちや考えを表現する。 ○自分のできる仕事に責任をもって取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の立場に立って行動したり、自分や人を大切にしたりする。
実践計画	<ul style="list-style-type: none"> ・学年相当の各教科学習 ・単元や行事の振り返りとして感想や考えを書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の身体を知る ・立位、歩行訓練 ・身体のケア 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業についての情報収集、調べ学習 ・憧れの職業人へのインタビュー活動 ・職場見学 	<ul style="list-style-type: none"> ・係活動 ・児童会活動 ・他学部との交流活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳の時間 ・日常生活の中で

② 各教科と特別活動での実践

4月からのA児の様子を見ると、周囲の人々とのやりとりで困ったことがあると、すぐに教師を頼ったり、顔色をうかがったりする場面が多くあった。自分の考えや思いを伝えることが苦手な様子であった。将来、社会へ出た時には、自分の考えたこと・感じたこと・体験したことを周囲の人に分かってもらえるよう、表現できるようにする必要がある。そこで、A児の自己表現力を育てることとした。

ア 書くことによる取り組み

学校生活での活動や行事などの体験活動を題材にし、書く活動を進めていった。体験活動と書く活動をセットにすることで、児童にとって体験したことが分かりやすくし、考えたことや感情など児童が表現しようとすることに広がりをもたせた。また、体験活動での様子を想起しやすくするため、写真と吹き出しカードを使用した。吹き出しカードに体験活動での様子や自分の感情、感想を書く取り組みを行った。最初は、「イエーイ」などと写真に写っている自分の姿に簡単なセリフを付けていたが、徐々に「○○が難しかったけど、うまくできて良かったです」「○○が嬉しかったです」など、その時の自分自身をよく見つめ、その時の気持ちや考えたことなどを文章で表現することができるようになっていった。

また、毎日簡単な日記を書くことも継続して取り組んだ。自分の感情や気持ちを「なぜなら…」という理由を付けて書くことで自分自身の気持ちや感情を整理して考え、表現することができるようになった。

イ 話す場の設定

マンツーマンでの授業が多いため、特定の教師だけとのやり取りに慣れきっている様子があった。話し合い活動や、発表などの場を設定して自分の意見を人に聞いてもらう活動がもちにくい現状があった。そのため、調べ学習のポスター発表、外国語活動等で場を設け、小学部や級外の職員から協力してもらい、自分の考えや意見を伝えたりする経験を積んだ。質問をされた時などに、焦ってしまったり、伝えたいことがふっと頭から抜けて伝えられないような状況に

なったりすることも多々あったが、回数を重ねていくうちに自分で何とか言葉にして表現しようとする姿が見られるようになった。

③ 自立活動での実践

ア 自己理解を促す

自立活動の時間は、毎日30分間設けて行っている。足の変形や拘縮を防ぐために、身体のマッサージやストレッチは毎日欠かさず行った。腕や肩の力を使うことも多いため、身体が凝りやすく、マッサージをして身体をほぐすことが必要であった。児童の身体の状態を知ったり、ある程度の力をかけて行ったりしなければならぬので、教師がマッサージやストレッチをすることは、もちろん必要なことではある。しかし、A児の様子からは、身体を雑に扱うような様子や、支援者からのマッサージに頼り切る様子が見られたりした。このような姿から、自分自身の身体と一生向き合うA児本人が自分で身体の状態を触って確かめたり、変化に気が



写真1 A児の排泄記録表

が付けるようになっていたりして、自身の身体としっかり向き合うことができるようになってほしいと考えた。そこで、定期的に「自分の身体を知ろう」というテーマで授業を行うことにした。養護教諭と連携をとり、実践を行った。二分脊椎症とは、どんな病気なのか、どんな症状が起りやすいか、より良くしていくにはどんなことが大切か等、説明を行った。A児は、真剣に話を聞いたり、モデルを見たりしながら、実際に手を動かしたりしてマッサージの方法やポイントを学習した。この授業後には、「自分の身体を守るのは自分。大切にしていきたい。」と感想をもった。毎日のマッサージでは、自分で足を伸ばしながら「今日は、いつもよりも足が伸びにくいな」「足が冷えているから、もっと温かくした方が良いな」など、自分で足伸ばそうとしたり、足が冷えないように厚手の靴下やレッグウォーマーなどで温かく保てるような工夫をしたりするようになってきた。また、排泄のリズムを知るために排泄記録表の記入も始めた。自分自身の身体のことを知ることで、身体を大切に、より良くしていこうとする姿が増えていった。

イ 達成感や自信をもたせる

A児は、自分の言動に自信がもてなくて消極的な面がある。そこで、自己選択したり、自己決定したりする力を伸ばす中で、「できた」「やったぞ」という経験を積み重ね、自信をつけたいと考えた。経験不足の事柄や初めての活動でも、A児が自分で課題を選んだり目標を決定したりするようにした。自立活動では、立位や歩行の訓練を行っている。A児にとって、立位や歩行訓練は、体幹が不安定で苦手な活動であるが、身体のバランスをとったり、手で身体を支えたりする練習をするためにはとても重要な活動である。立位や歩行をすることの必要性を教師と共に確認した後、「今日は○○と○○、どこまで歩くか」と歩く距離を選択したり、A児が自分で目標を決定したりする経験を積み重ねた。始めは、泣いたり大きな声で叫んだりしてその場を回避しようとし、活動が進まないことが多くあった。しかし、活動を重ねていく中で、目標を達成でき時には、「やったぞ」「今日は○○まで歩けたぞ」という達成感や充実感を感じている様子であった。目標を達成できたことや周囲の教師や友達から「すごい!」「頑張っているね」と称賛されることなどが自信につながり、次の活動への励みとなっていったようであった。

自分で課題を選択したり、目標を設定したりすることで、「自分の決めたことだから」と責任感もち、それを達成しようとする意欲的に取り組むことができるようになってきた。立位や歩行をすることへの抵抗感がなくなると共に、徐々に歩く距離や時間が長くなった。「よし、頑張ろう!」「どんどん行こう」と前向きな発言で活動に取り組むことができるようになった。

④ 総合的な学習の時間での実践

働く人々との出会いを経験することで、その人の生き様や人となりを感じ、職業に対する認識をもったり、将来の自分自身の生き方を考えたりするきっかけとなるのでは、と考えた。そこで、総合学習では「職業について調べよう」というテーマで1年間を通して学習を行った。「課題の設定→調べ学習→働く人との出会い、インタビュー（修学旅行）→

自己の振り返り→まとめ」という活動の流れを設定して取り組んだ。

ア 働くことへの興味を広げる

興味のある仕事（書店員，保育士，バスケットボールプレイヤーなど）について，イメージマップを作成した（写真2）。A児は，これまでの経験から思いつくことや連想することを挙げていった。マップは広がっていったが，見た目や人柄などが中心であった。

次に，インターネットや書籍を使って，興味のある職業について調べ学習を行った。大まかな仕事の内容や苦勞，やりがいなどを知ることができた。

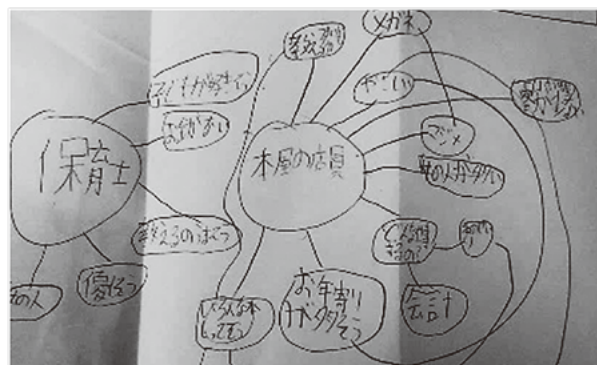


写真2 イメージマップ

イ 働く人々との出会い

修学旅行では，職場（書店）見学や施設（身体障害者福祉施設）見学と，そこで働く人々へのインタビュー活動を行った（写真3）。A児は本を読むことが好きなことから，書店の店員に興味があり，大型書店の店長から話を聞くことができた。また，A児が将来利用できそうな施設のトレーニングジムで働くインストラクターの方にも話を聞くことができた。

初対面の人との会話に慣れず，最初は緊張した様子であった。しかし，話を聞いているうちに話に引き込まれ，真剣にメモを取った。これまで，コミュニケーションをとることに消極的な面があったが，インタビュー活動を通して自分の疑問を率直に尋ねることができ，充実した活動となったことで，達成感を感じている様子だった。



写真3 インタビューの様子

インタビュー前のイメージマップの作成段階では，表面的な職業観や捉えであったが，働くことの苦勞や喜びを知ることによって，働くことの意義を考えようとする姿が見られるようになった。また，インターネットや調べ学習だけでは知ることができなかった，「この仕事に就くために必要なこと」「将来のために今しておかなくてはならないこと」などを，直接聞くことができ，A児が自分自身を見直すきっかけとなった。

【A児の手紙より】

インタビューで，仕事のやりがいとか〇〇書店の名前などいろいろなことを聞くことができて，勉強になりました。〇〇さんの言葉で一番心に残っていることは，「本や新聞をたくさん読むことが大切」ということです。これからは，〇〇さんに言われたように学校や学園で本や新聞をいっぱい読みたいです。将来は，書店で働いてみたいです。

車いす用の機械でトレーニングをして，肩や背中がきたえられたような気がしました。

〇〇さんに言われて，心に残っていることは，「今やっていることを一生懸命すること」「なんでも挑戦すること」です。これから学校や学園で勉強とか体力作りをがんばりたいです。いつかはまた，トレーニング室を利用したいです。

この活動により，将来の夢を実現させるために，今の自分自身を振り返り，何をすべきかと自分の生き方を考えるA児の姿が見られた。将来のために自分が頑張りたいことを見付け，意欲を高めることができた。

5 A児の変容

4月当初は、自分の意に沿わないことがあると泣く、その場を回避しようとする精神的に弱い一面があった。自立活動等を中心に、「やった」「できたぞ」と自信をつける経験を積み重ねたことで、初めてのことに「まずはやってみよう」「どんでんいこう」と前向きな発言で挑戦しようとする姿が増えてきた。随時、目標やできそうなことを確認し、意欲を維持向上させながら、スモールステップで取り組むことでできるようになったことが増えていった。支援者に依存的な様子も少なくなり、自分の身体を自分で守ろうとする姿、自分の身体をより良くしていくために努力しようとする姿が多く見られるようになった。介助が必要であったトイレでの排泄では、車椅子から便座に乗り移り、自分でできるようになるなど、身辺処理の自立でも大きな成長があった。

6 成果と課題

(1) 成果

実践の結果、これまで述べてきたように、A児に前向きな変容があったといえる。それは、A児が将来自立や社会参加するために必要な力の重点を絞り、教科や領域、合わせた指導などと関連付けたことで、学校生活や授業全体を通してキャリア教育の視点で手立てを講じることができたからであると考ええる。自己を見つめる→自分の課題に気付く→自己選択・自己決定をする→目標を設定する→目標、夢に向かって取り組む→自己を見つめる→…といったプロセスを繰り返し、螺旋階段のように一つ一つの取り組みや活動を積み重ねることが、A児のキャリア発達へとつながっていったのではないかと感じている。

(2) 課題

A児の身に付けたい力と具体的実践計画を作成する際に、個別の指導計画との関連性が薄かったことが課題である。キャリア教育で身に付けたい力と個別の指導計画を関連付け、支援の手立てをより明確にし、キャリア発達を促すことが必要であったと感じている。

A児と周囲の人との関わりについては、学校生活だけでは狭く限定されがちである。実践では、修学旅行を利用して、働く人々へインタビューをする機会を設定した。そのことが、A児が夢や希望を膨らませることの一つの材料となり、意義のある活動になったと考える。今後もこのような人との出会いやつながりを教師が意図的に仕組んでいく必要がある。A児の利用している入所型福祉施設や療育施設と連携し、同年代の生徒との関わり、目標とする存在、憧れの人々との出会いや関わりを設け、広げていくことができると良い。

キャリア発達を促すためには、ある期間の取り組みだけで完結させるのではなく、小学部から高等部にかけて段階的、系統的に取り組んでいく必要がある。今回は、A児の小学6年生段階でのキャリア発達に重点をおき、実践を行った。今後は、中学部、高等部段階での目標や付けたい力を明確にし、系統的な指導を行っていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- 高知県教育センター（2011）「特別支援学級担任 通級による指導教員担当教員のためのサポートブック」
- 中央教育審議会答申（2011）「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について」
- 文部科学省（2011）「キャリア教育とは何か」

参考文献

- 中央教育審議会答申（1999）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」
- 湧武真也（2013）「肢体不自由特別支援学校における“キャリア教育”の在り方について」